

経済同友会・同友クラブ共催 新春会員懇談会

パラリンピックを通して考える共生社会



講演：河合純一氏

毎年、経済同友会・同友クラブ共催による新春会員懇談会を開催している。コロナ禍で、リアルでの開催は3年ぶりとなった今回は、日本パラリンピック委員会委員長を務める河合純一氏を招いた。東京2020パラリンピック競技大会の成果をレガシーとして発展させていくことが求められる中、競技生活の思い出やパラリンピックの歴史を振り返りつつ、共生社会の実現に向けた思いを語った。

日本パラスポーツ協会 日本パラリンピック委員会 委員長

1975年静岡県浜松市生まれ。15歳で全盲となる。パラリンピック競技大会に92年(バルセロナ)から2012年(ロンドン)まで6大会連続で水泳日本代表として出場。金メダル5個を含む日本人最多、通算21個のメダルを獲得し、日本人で初めてパラリンピック殿堂入りを果たす。20年1月より日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会委員長。東京2020パラリンピック競技大会、北京2022パラリンピック冬季競技大会では、日本代表選手団団長を務めた。

「障がい」とは何か

生まれつき左目はほとんど見えず、0.1に満たなかった右目も中学3年生で見えなくなり、全盲になった。目の見えない私は、時間を読み上げる携帯電話やページ数の音声で講演スライドに設定したパソコンなどを使い、耳で時間を確認している。障がい者は「できない人」とネガティブに思われがちだが、時計を見るのも音を聞くのも、時間をする方法が違うだけだ。「できない」ではなく「できる」方法を考えればよい。

かつて、障がいとは身体機能の不全・損傷でできないことがあり、その結果、進学や就職などで社会的不利を受けることだと考えられてきた。しかし、身体機能から社会的不利までを一方向の流れで考えるのはおかしい。車いすの方が階段の前で困っていても、足が動かないことや車いすに乗っていることは障がいではない。エレベーターやスロープがないために移動できないことが障がいだ。生活しづらさの原因は障がい者個人の側ではなく、環境や設備、周囲の人々の中にある。妊婦や高齢者、乳幼児を連れた方など社会生活で困っている方は多く、障がいもその一つであり、障がいの大小は環境で変わる。障

がいは、社会が生み出している。

「障がいを持つ人」と言われることがあるが、「持つ」という言葉は能動的な行為を意味しており、「持たない」という選択肢を前提としている。しかし、障がい者に障がいを持たないという選択肢はない。したがって、「障がいのある」という表現の方がより実態を表している。また、「障がいを乗り越えて金メダルを取った」との紹介にも違和感を覚える。障がいは乗り越えるものではなく、受け入れるものだ。受け入れて、前に進んでいくということだ。

パラリンピックの歴史と現在

パラリンピックは1964年の東京大会の際、Paraplegia(脊髄損傷による運動まひ)のOlympicとして始まったが、現在はParallel(平行した)なOlympicを意味している。そのため、オリンピックと同じ年に同じ都市、同じ会場で開催されている。

起源は、ロードウィッチ・グットマン博士が1948年にロンドンのストーク・マンデビル病院で負傷兵士のリハビリとして始めた。

国際パラリンピック委員会(International Paralympic Committee: IPC)の設立は1989年、本部はドイツの

ボンにある。パラリンピックの価値は勇気、強い意志、インスピレーション、公平の四つであり、それぞれに深い意味があるが、特に公平についてお話ししたい。公平という言葉は、パラリンピアンが持つ「多様性を認め、創意工夫をすれば、誰もが同じスタートラインに立てることを気付かせる力」を表している。IPCはこれをEqualityと表記する。Equalityの一般的な和訳は「平等」だが、日本パラリンピック委員会ではあえて「公平」と訳している。誰に対しても同じである平等ではなく、一人ひとりの個性や多様な価値観に応じて必要な対応を行うことで、同じ機会や機能を公平に実現する。パラリンピックに感動するのは公平な条件で競い合っているからだ。

IPCの目的はパラリンピックの開催ではない。開催を通じて、より良い社会に向けた変革の機運、パラリンピックムーブメントを生み出し、インクルーシブな社会を実現することが目標だ。

パラリンピックの競技とクラス分け

パラリンピックは公平な条件で競い合うための精緻なクラス分けが特徴だ。水泳の場合は全部で14クラスだ。1～10は運動機能障がいの程度に応じたク

ラスであり、11～13が視覚障がい、14が知的障がいであり、全盲の私はS11だ。クラス分けは陸上・水中での各種テストの他に、実際の競技の観察による確認も重ねて決定される。

視覚障がいの水泳には固有のルールがある。一つ目はタッピングだ。選手は目が見えないため、ターンやタッチに失敗して激突する恐れがある。そのため、2メートルくらいの棒で、プールサイドに近づいてきた選手に合図を送る。

二つ目はブラックゴーグルだ。最も視覚障がいが重いS11クラスでは、選手の条件を完全に同じとするため光を完全に遮断するゴーグルを着用し、レース後に競技役員が現場でチェックする。競技種目やクラスによってルールはさまざまだが、公平に競い合うために工夫が重ねられている。

夏季パラリンピックの東京2020大会では水泳、陸上競技、アーチェリー、ボッチャなどの他、新たに採用されたテコンドーとバドミントンを加え、全22競技が行われた。また、昨年北京で開催された冬季パラリンピックは、アルペンスキーやスノーボード、車いすカーリングなどの六つの競技だ。今日では、パラリンピックはサッカーワールドカップやオリンピックに次ぐ規模のスポーツイベントだ。

夢の力、夢は生きるためのエネルギー

これまでの人生を振り返ると、夢が持つ力を強く感じる。私自身、常に夢を持って生きてきた。講演会で夢の力について話すと、「夢は変わってもいいの？」と質問いただくことがある。私は夢が変わるとは考えていない。自分の成長とともに、夢も成長していくと考えている。私自身、幼い頃は甘いものが好きで、ケーキ屋さんになりたかった。お金持ちになれるからプロ野球選手にもなりたかったし、国で一番偉い内閣総理大臣になりたいと思ったこと

もある。JRの駅員にあこがれた頃もあったが、成長するにつれて教師になりたと思うようになった。

私は15歳の時に右目の視力も失い、光さえ見えなくなってしまった。しかし、教師になる夢を見失うことはなかった。教師になる方法を考え続け、大学に進学した。そして、教壇に立って子どもたちに教える自分の姿を頭の中に思い描き続けた。夢を実現するには、夢をかなえたときの姿をできるだけ具体的にイメージする力が必要だ。

その頃に抱いたもう一つの夢が、パラリンピックの金メダルだ。5歳から水泳を始め、8歳の時にソウルパラリンピックを見て、いつか出てみたいと思った。17歳の時にバルセロナ大会に出場できたのは大変な喜びだったが、銀メダル二つ、銅メダル三つで、金メダルを獲得できなかった。この喜びと悔しさ、金メダルという忘れ物を手に入れるという強い思いが、水泳に一層打ち込む原動力になった。

同時に、パラリンピックに出場して自身の課題を知ることができた。自分の立ち位置を知り、金メダルという目標を明確に描くようになった。夢は生きるエネルギーであり、夢に向かうことで前向きさが生まれてくる。年齢や障がいは何も関係なく、全ての人がそれぞれの夢に向かって頑張れる環境が重要だ。

もう一つよく聞かれるのは、壁やスランプはなかったのかという質問だ。競技生活はもちろん、社会人としても数多くの壁に突き当たり、失敗を重ねてきた。ただ、こうした逆境は誰にでも必ず訪れる。そのときに逃げ出すのか、向き合って乗り越えるのかが分かれ道だ。

パラリンピックでは何度もプレッシャーを感じたが、その経験から言えることは、ネガティブに捉えてはいけないということだ。緊張は決して悪いことではなく、適度な緊張感で成功する場合も多い。プレッシャーは当然で

あり、うまく付き合う方法を見つけることが重要だ。

一方、失敗を恐れてしまうこともある。ただ、最初からうまくいくことは滅多にないため、失敗自体は問題ではない。本当の失敗とは失敗から学ばないことであり、失敗は成功のもとだ。失敗から次に失敗しない方法を学び、成功した場合は、なぜ成功したのかを振り返る。稲盛和夫氏が話されていた人生の方程式も、能力だけでなく考え方や熱意との掛け算が結果を生むのであり、夢の力と失敗や成功から学ぶことが重要なのだと思う。

講演では、夢に向かうためにまず自分を知ろうと話している。自分が好きなことや嫌いなこと、得意なことや苦手なことを書き出すと、いくつ書けるだろうか。同様に、やってみたいことを100個書き出してみる。書き出してみると、自分の可能性に気が付くと思う。その可能性を伸ばすために何をすればいいのか。今日から夢や目標に向かい、やるべきことを考え、周りの人に宣言してほしい。そうすると、夢への努力が具体的な形になってくる。

パラアスリートの雇用と課題

パラリンピアン意識調査を行うと、5割は競技引退後の生活を考えているが、しっかり考えていない人も半数近い。以前より改善してきたが、まだまだ低い。「不安を感じていない」「競技に集中したい」といった回答だけでなく、「考えると不安になってしまう」という回答もある。一方、引退後の生活で取り組みたいこととして、競技団体の役員や事務局の仕事はあまり人気がなく、競技の普及や指導を挙げる人が多く、民間企業で働きたいという回答も多い。

パラアスリートが民間企業で働く際、大きくは正社員、契約社員、競技優先のアスリート雇用の3タイプがある。どのタイプにもメリット・デメリットがあり、優劣はつけられない。ただ、パ

ラアスリートという枠を超えて、より広く障がい者も輝ける職場をつくるには、四つの合理的配慮が必要だ。

オフィス内にエレベーターやスロープを設置する「物理的」な配慮、字が読めなかったり会議内容が聞き取れない課題を解決する音声ソフトや手話通訳といった「情報」面の配慮、フルタイムの就労が困難な方に対応するフレックス勤務などの「制度」の配慮、誤解や差別、偏見をなくすための研修といった「心」の配慮だ。これらは障がい者だけでなく、あらゆる人が輝ける職場づくりだ。

インクルージョンと Equalityの実現を

昨今、ダイバーシティとインクルージョンが一括りにされているが、ニュアンスが違う。米国で多様性を提唱したヴェルナ・マイヤーズ氏は「ダイバーシティとは、パーティーに招待されること。インクルージョンとは、ダンスに誘われること」だと言う。その場にいることと、一緒に取り組むことは違う。パラリンピックムーブメントが目指すのは、違いを受け入れて一緒に取り組む社会だ。

もう一つ重要なのがEquality（公平）だ。誰もが同じ機会や機能を享受することが重要だ。例えば、背の低い人と高い人が壁越しにショーを見るとき、同じ高さの台を渡しても、背の低い人は壁に届かずショーを見ることができない。同じ高さの台は一見平等でも、背の高さという本人に責任のない不平等を前に、フェアとは言えないだろう。背の低い人には高い台を用意すれば、皆がショーを楽しめる。Equalityとは、それぞれに応じた機会を提供して公正な環境を整えることで、不均衡を是正し、誰もが成果を追求できるように対処しようという考え方だ。

パラリンピックは人間の可能性の祭典だ。パラアスリートたちが、こんな



ことはできないという人々の思い込みを打破する姿を通じ、誰もが自分の可能性に気付く。IPCは、ダイバーシティは現実であり、インクルージョンは選択だと訴えている。気付いているか否かはともかく、世界はすでに多様だ。その中で、一人ひとりの基本的人権が尊重され、誰もが公平と公正に自分の意志で選択できる社会をつくれるかは、私たちの選択にかかっている。

東京2020パラリンピックのレガシーの一つに#WeThe15がある。世界人口の15%、実に12億人が障がいによって生きづらさを感じている。閉会式の出演者の15%は障がい者だった。あの閉会式こそ世界の現実であり、閉会式を見て誰もが生き生きとしている姿に共感したなら、インクルーシブな社会へと変える側に立っていただきたい。

そして、このことは一方的に経済負担が生じるものではないことも伝えたい。ダイバーシティとインクルージョンに取り組んだ企業では、イノベーションが促進され加速する。丁寧な対話を通じて理解を広めていくことが重要だ。共生社会の実現には、気付き(Knowing)を経て、何かやってみる(Doing)、意識せずに振る舞う(Being)の三つのステップがある。今はKnowingとDoingの間くらいだろうが、着実に進んでいる。

東京2020のレガシーを

スポーツ庁は東京大会後も持続的に国際競技力の向上を図るため、強化に取り組んでおり、パラリンピック競技も裾野の拡大やオリンピックとの連携促進を図っている。両者を一体のものとして捉えるユニバーサルスポーツの

考え方を推進し、スポーツへのアクセス環境の改善や競技団体の組織基盤強化などを進めていく。こうした方針を受けて、日本パラスポーツ協会は「活力ある共生社会の実現に向けて」と題する2030年へのビジョンを取りまとめた。共生社会という言葉は定着したが、これからが東京2020のレガシーを築く大事な時期だ。

来年2024年にはパリ2024パラリンピックが開催される。パラリンピアンたちの活躍を期待してほしい。

ハードのバリアを乗り越えるハートを

日本語には「みる」という言葉がある。漢字だと「見る」「観る」「診る」など、全て視覚を意味する字が用いられる。しかし、「やってみる」「行ってみる」など、平仮名では能動的な挑戦を表す言葉だ。共生社会に向けて、見るのではなく「みる」ことをお願いしたい。サン＝テグジュペリの「大切なものは目に見えない」という言葉は誰もが知っているだろう。「みる」ことこそ、共生社会への第一歩だ。

そして、共生社会とは「共に生かし合える社会」であり、食べ物に例えるとフルーツポンチだ。ミックスジュースのように個性をすりつぶして一つになるのではなく、色合いや味わいといった個性を活かしながらおいしくなる。個性をしっかりと残し、主張すべきは主張して、「共に生かし合える社会」を築くには、相手を知るためのコミュニケーションが必要だ。インフラや設備などのハード面にもさまざまな課題があるが、乗り越えるにはハートが不可欠だ。